

破綻からの奇蹟

～いま夕張市民から学ぶこと～



森田洋之著
南日本ヘルスリサーチラボ
1296円

8年前に財政破綻した人

ると言う。

口1万人の北海道夕張市。その突然変異とは。まず、171床の市立病院が閉鎖され、診療所と老健に変わった。救急病院がなくなり、救急車が市外の大病院に着くまで2時間も。高齢化率47%で、老人の多い住民たちは医療が遠ざかり不安におののいていそいだ。

そこへ南国、宮崎から家族連れで飛び込んできた医師が著者である。その活動と驚くべき体験の記録だ。

訪問診療の患者が増えた。病院閉鎖の2007年時の44人から5年後には120人に。特養での看取りが90%から100%に。全国的にはこの5年間に10%近く増えている救急車の出動が23%も減った。つまり、病院を必要としなくなったのである。



夕張市に「突然変異」が起き、住民に不安はない。逆する明るい希望の光が見え

死のあり方を見ると、目を見張らざるをえない。老衰による死者が急増。死者の割合の中で2・3%から

病院消え、増える老衰死・減る医療費

14・1%に伸びた。

こうした変化の結果、何と医療費が下がってしまった。北海道全体で12年に1人当たり86万円だが、夕張では80万円。医療機関が減ったため死亡者が増えて医療費が下がったかと言うと、そうではない。死亡者数と死亡率は以前と変わっていない。



病院頼みの状況が一変し、老衰に帰結する在宅重視に大きく転換したのである。それに対し「長年住みついた地域の伝統や絆があるから」との反論がありそう。実は、夕張は全国からの移住者でできた炭鉱町。東京や大阪のニュータウンや大団地とそっくり。東京都板橋区の大団地、高島平の高齢世帯率は63%で夕張の60%と変わらない、と著者は強調する。

ただ、夕張には宝物があった。「きずな貯金」である。近所分まで雪かきをしてしまう。地域のつながりが強い。その貯金が年老いて威力を発揮し、近隣の見守りが行き届いている。1人暮らしでも大丈夫というわけだ。

さらに見逃せないのは、「お任せ」からの脱皮、「自分で決める」という意識転換だろう。薬や病院に任せない。精一杯自分らしく生きて自然な看取りを選ぶ。 「人事を尽くして天命を待つ」覚悟ができたという。「病院、施設から地域へ」と宣言した地域包括ケアの格好のモデルがここに

ある。

高齢世帯率が高まるのは近未来の日本そのもの。そこへ夕張的手法を持ち込めば「世界の高齢化対策のり

評・浅川澄一

ジャーナリスト

元日本経済新聞 編集委員